

2-O-7

## 講義資料と授業評価や学習効果の関連

高岡 裕  
菅野亜紀 大田美香

我々はM科3年生に、「病院・医療情報管理総論」を15回講義している。この講義の目的は、①病院・医療機関の構成、組織、各部門の役割分担と連携を解説し、②医療情報のシステム化の技術基盤、病院情報システムを理解してもらう事を主眼としている。特徴として、③実務面の取り組みを、病院の実務担当者が紹介する形式をとっており、具体的には我々三名以外に、7名（検査部副技師長、放射線部副技師長、感染制御部副部長、看護部副部長、安全管理部師長、薬剤主任、医事課課長）が、各部門の業務の実際を講義してもらっている。初年度は重要な内容についてはその旨を説明し学生が筆記にてノートを取り配布資料は最低限にし、次年度は重要な内容を中心に配布資料を若干増やしノート記載を半分にし、3年目は全ての資料を配布し重要な内容について資料中に記載した。

定期試験問題は、試験問題アーカイブ（データベース）を作りその中からランダムに問題を選択することで、各年の比較を可能にした。なお、解析を容易にするために一問には必ずAとBの2題を配し、前者のみ正解は1、後者のみ正解は2、両方正解は3、両方間違いは4をマークシートで回答する形をとった。本発表では、講義資料と成績等の関連について、分析した結果を報告する。

2-O-8

## 人は「唯我独尊」にあらず —ヒト腸内細菌からの考察

野村秀明

【はじめに】人は古来「天上天下唯我独尊」と嘯くが、果たしてそうであろうか。ヒトは体表皮膚から、様々な管腔粘膜に至るまで、無数の細菌群と共存しており、決して単一な生命体ではない。特に口腔から肛門に至る消化管内には、宿主の体細胞数を凌ぐ100兆個の細菌が常在し、その重量は1.5kg超、細菌の総DNA量は宿主のその100倍にも上る。これら消化管内の細菌は、腸内フローラを形成し、宿主と静的（static）な平衡状態を保っていると考えられてきた。しかし近年、腸内細菌のDNA解析が進み、その再評価が行われるにつれ、宿主との関連性において、種々の驚愕的な事実が明らかにされてきた。

【腸内細菌研究の現況】腸内細菌は宿主に対し、従来考えられてきた静的（static）というよりむしろ、動的（dynamic）な作用を有することが示されてきている。実際、腸内細菌に起因すると考えられる疾患は、消化器疾患にとどまらず、代謝疾患、免疫疾患、さらには精神疾患にまで及ぶ証拠が次々と明らかにされつつある。つまり、腸内細菌は宿主の腸管内に共存し、時に寄生（悪玉菌）や共生（善玉菌）作用を示すのみでなく、ほとんど宿主の身体的、精神的状態までも支配していると言える程である。今回、昨年の医療検査学科卒業研究で行った乳酸菌を投与した実験データとともに、最近の腸内細菌研究や、臨床応用されつつある糞便移植法を紹介し、今や「主客転倒」した（！）腸内細菌と宿主（ヒト）の関係性について考察する。